

## “残日録”余話

## An essay on a gentle and hearty life as “Zanjitsuroku”

金沢大学名誉教授

波田野 基 一

最近或る人の随筆に医者に向く人の三条件というのがあった。それは、「丈夫な体」、「優しい心」、「まずまずの頭」というものである。云われてみると、何も医者計りでなく、すべての場合に通用しそうである。この中でも、或る程度客観的に判断できそうなのは、「体」と「頭」であろう。「体」の健康は臨床医学的にそれなりのデータがとれるし、「頭」の程度も各種試験（偏差値が主？）で絶対ではないが判断は出来る。難しいのは第2番目の「優しさ」である。

この様な心の問題というのは夫々人によって見方評価が千差万別である。然もこの三者は夫々独立してる様に見えるが必ずしもそうでないらしい。そして、「優しい心」とは、自分も相手と同じ人間であるという意識から他人の痛みや憂いが分る心であり、感受性豊かな心のことであるという。

私も大学（がん研）を離れて福井県衛生研究所（衛研）に七年、その縁で福井県結核予防会（結防）の世話を仰せつかって三年、医学と係わる社会保健分野で、人との出会い交流にこの「心の優しさ」が如何に必要かを痛感させられた。この十年の日常は、臨床の所謂御医者としてのつきあいではなかった。専門とした基礎医学の外に、医師資格としての医学的知識観点を私が充分「優しく」活かしてくれるであらうという期待に満ちた人々との出会いであった。衛研、結防という公衆衛生的保健、時には福祉関連の諸業務には未経験も多く、常に我が身の眼線を低くして、「優しさ」を意識して実践した積りで何とかカバーして来た。勿論、周辺の金大医出身諸君に助けられたのも事実である。

この「優しさ」は従来女性特有の性格と見られているが、それとは多少異なるニュアンスもありそうである。人は「優しさ」の下に生きるといい、太閤秀吉成功の根拠は他人に対する「優しさ」であるともいう。その「優しさ」はどうしたら得られるであらうか。生れつきのももあるが、或る程度努力で身につけられそうである。「自分の心を低い視線で謙虚な所に置くと、優しい心が見えてくる」という人もいる。

専門領域を離れ、新たな出会いに半ば迷い、半ば心に

「優しさ」といい聞かせ乍らの福井往還十年は、私にも地域社会への奉仕がどうにか出来てるかなという自惚れと自信を作ってくれた。特に衛研での厚生行政（感染症、食品衛生、保健情報等）は割に簡単にこなせたが、福井地域特有の原発関連環境放射能監視業務には初め戸惑った。然し、幸いにも同じ職場の金大薬工出身のベテラン諸君の御蔭で何とかなる様になった。これらの経過で、他人への「心の優しさ」と共に自らの心を鞭打った原動力が次の二つの東西の詩であった。

一つは、「老驥、櫪に伏すとも、志、千里に在り、烈士の暮年、壯心已まず。」

（曹操、歩みて夏門を出づる行、207年）、

二つは、「青春とは人生のある時期のことではなく、心の持ち方をいう。歳月は皮膚に皺を刻むが、情熱の消滅は魂に皺を刻む。六十才であらうと、十六才であらうと、人の胸には驚異に魅かれる心、おきな兒のような未知への探求心、人生への盡きざる興味がある。自然に対し、人に対し、神に対し、美しさ、喜び、勇気、崇高さ、力を感じとることが出来る限り、その人は青春に住んでいる。」

（八十才の歳月の高みにて、サムエル・ウルマン、1920年）

何れも齢を感じ萎えんとする心を奮い立たす気概を示している。これらを意識しつつ、大学を離れて十年過ぎた私も、昨1997年、叙勲の通知を頂いた。叙勲には様々の見方もあるが、年の順で漸く諸先輩の跡につけたという安堵感に加えて、人々の協力支援を感謝した。そして今後、この叙勲を汚さない過し方も考えさせられた。その時、心に浮んだのが、前記（曹操）と（ウルマン）の詩と共に、“三屋清左衛門残日録（藤沢周平）”の生き方である。そこには、隠居ながら、「日残りて未だ昏るるに遠し」として、受ける藩内のめごと処理に、「老驥」ながら「青春」の血を滾らして年寄りの冷水とささやかな反省の中に、人生の機微にふれ、「心の優しさ」からのほのほのとした日々が描かれている。熟読して及ばずながら、私も“叙勲残日録”の真似事でも綴れたらと思いつつ過している。